

上演② 星稜高校「オデュッセイア ～遙かなる10年の旅路」

世界最古の叙事詩のひとつである「オデュッセイア」を題材にした挑戦に素直に感心し、「息子と父親と海 の物語」に時間を忘れるほどに引き込まれました。完成した作品は故郷への旅路を目指す古代の英雄と父を探 する息子の物語を重ね合わせる巧妙なプロットと魅力的な演劇的表現に溢れていました。

オープニングは秀逸で、慎（息子）が本を開いた途端に、光と音によるラプソディーのような雰囲気舞台全体に満ちて期待感が膨らみました。続いて飛び出した2人の妖精と3人女神などの大勢の魅力的な衣装とメイクを 施した俳優陣による神話のキャラクター達がファンタスティックでポップな世界を生み出していきました。

旅が始まると作品の勢いは更に増し、魅せる演劇性をたっぷりと披露してくれました。キャストでは慎と母の みならず、オデュッセイアや神話の怪物も含め、群像劇の中でも個々の俳優は確かな身体能力と十分な声量を感じさせ存在感を出していました。1つ目巨人を大人数での輪唱セリフで聞かせる演出と一音乱れぬセリフで応え たアンサンブルも見事でした。また、多くの群衆の中で慎が本を読む姿を常に舞台上で見せ、「彼の旅」を強調する演出も印象的でした。

美術の表現力は突出していて、白のブロック群を用いた船や宮殿、孤島への変幻自在な変容は素晴らしく、特に嵐のシーンでは船が波に翻弄される見せ方が非常に創造的でした。さりげなくギリシア的なレリーフ飾りも 施され、細部に手を抜かない意識が感じられました。舞台も余すところなく使い、柱の表面処理と配置のバランスも良く、最後のカフェのシーンでの柱の周到的な使い方にも感心しました。

照明は黄金色をメインに据えて神話的な雰囲気作りを成功させて、衣装の造形や工夫もキャラクターの確立 に寄与し、華やかさを作っていました。

最後の本/羅針盤の伏線回収は絶妙でしたが、オデュッセイアの旅を丹念になぞりすぎたため、慎と父の邂逅 がやや手短な印象が残りました。慎の「父を探す旅」に没入感はあるものの、もう少しオデュッセイアと慎の話 を織り交ぜられれば、最後の父子の邂逅の感動がより高まったかもしれません。

個人的な要望ですが、2時間のフルスケール版で堪能したいと思いました。